
天地物語

重装改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天地物語

【Nコード】

N6167Y

【作者名】

重装改

【あらすじ】

いつか、どこかでさらなる技術的進歩を遂げる事ができた人々と、できなかった人々のお話です。

初投稿ですから文章に粗が目立つかもしれません

その時は是非ご指摘お願いします

プロローグ

いつの時代ともわからないいつか、人は様々な技術を産みだした。

大陸サイズの人工島を浮かび上がらせるほどの反重力エネルギー、太陽光と定期的なメンテナンスだけで半ば永久的に食料、エネルギーを生み出してみせるプラント施設等で生活は転機を迎え、医療面でも反老化カプセルを始めとした恩恵により、平均寿命はさらに高齢化することとなり、これらを手に入れた人々はまさにこの世の春を謳歌した。

しかし、これらの技術は、軍人、政治家やそれに追随する職業に就く者、高所得者等の特権階級に独占され、その他の人々は変わりない。いや、参政権を始めとする様々な人権の事実上の消滅や、それによる治安の悪化、何より反重力エネルギーの発生時に老廃物の形で生じる「黒い雪」による環境汚染等による生活圏の縮小で今まで以下の生活を強いられていた。

そんな中、一人の学者が新しく発案した新しい駆動システムの軍用転換へのテストの為に選ばれた島への直行便から物語は始まる…

一話（１）

何の変哲も無い旅客機が、空を飛んでいる。いや、正確には着陸のために降下を開始していた。

乗客の顔ぶれは30代、40代が2、3割、残りは10代後半に見える人々が占めている。

彼等に共通していることはピリピリとした雰囲気を全身から出していること、そして胸に付いた 天上の人 …… つまり特権階級を表すバッジである。

一方、同時刻

その旅客機を見上げる二人の人物がいた。

片方は肩までかかる髪を後ろで束ねた背の高い青年、もう片方は金髪と黒い肌が目を引く中肉中背の少年といったところか。

「博士、質問です」

少年が青年（どうやら博士と呼ばれている）を見上げて言った。

「これから来る、上の人って100人ちよつとであつてますよね？」

「そうそう。君と同じ年頃の子達はだいたい70人かな」

博士は少年に笑いながら返す。

「全員、適性 も君より上だ。それで、どうしてまたそんなことを？」

少年は頭を軽くかき、（ばつが悪いが恥ずかしいかの時に少年が無意識に行く、一種の癖である）これまた少し恥ずかしそうに答えた。
「いや、そういうわけじゃなくて、えっと…俺は 下の人 だけど、その人達と仲良くなれるかな、なんて」

「つまり、差別されるのが、怖い」

「ええ、まあ…」

博士は、少し考え込んで答えた。

「わからないな、ただでさえ特権階級とただの人だ、さらにさつき

も言った通り、彼等と君とは歴然とした才能の差がある。でも……」
「でも、何です？」

「天上の人といっても人間さ、全員がそういう選民思想ではないかもしれない」

それを聞いた少年の顔は少し安心したように見えた。

「おや、着陸したね。行こうか」

「は、はい」

それでも心なしか動きがギクシャクしている少年を見て、博士は早くも不安になった。

反重力装置から排出される有害廃棄物、通称 黒い雪 のせいで地上に住むことを余儀なくされた人々は、巨大なドーム内に生活に必要な全てを詰め込んで閉じこめることを選んだ。しかし、ドーム自体の維持費が馬鹿にならないため天上の人に頼らざるを得ず、両者の立場の差は開き、両者の嫌悪感は深まるばかりであった。

旅客機は、島の海沿いに位置したドーム内に着陸した。

といっても、 黒い雪 の処理のために旅客機全体を消毒し、さらに乗客にも厳重な消毒処理を施すことになる。

結局、乗客達がロビーに解放されたのは着陸から30分以上後のことだった。

ただでさえ地上に良い印象を抱いていなかった彼等、特に若い者達が直接的な原因が自分達にあることも棚にあげていかにも不満げな顔をしている頃、博士と少年が到着した。

一話(2)

向かってきた二人が博士と少年である事がわかった、100数人の先頭から30代そこそこであるう男が前に出た。

「桜田です。芦岡博士で間違いありませんね？」

「はい、よろしく願います」

お互いに軽い挨拶を交わすと、桜田と名乗った男が博士に不安げに質問した。

「博士」

「…何です？」

「そちらの子供は？」

博士は桜田の手の先の少年を見て、ああ、と納得したように声を出した。

「彼は、今回の計画で先だって試験に付き合ってくれたのです。名前は…」

そこで博士は急に口ごもる。心なしか視線も泳いでいる。

「…博士？」

「いや、ちよつとお待ちを。」

博士は桜田に背を向け少年に向き直る。

「…おい、俺は君のこと名前で呼んだこと無いぞ？」

「そりゃあ、名前ありませんし」

「…そうだっけ？」

「博士も博士ですよ。俺と博士の二人つきりが10年続いたからって、何も全部 おい だけですませなくても。…なんなら、今にでも付けちゃいます？」

あっけらかんという少年をよそに、博士は想定外の事態に頭を悩ませた。

「名前…名前ね。…そうだ、せっかくだから おい をなまらせてロイでどうだ？」

これに少年、

「ああ！いいですね、ロイ。」

目を輝かせて実に嬉しそうに賛同する。

「ふふふ、そうだろう。たったの二文字で覚えやすい。」

「…博士、そろそろいいですか？」

「えっ？…あ、っと」

博士は、桜田に声をかけられてやっと頭の中で自分の来た理由まで話を戻す。

「コホン、と、とにかく…テストパイロットを担当してくれたロイ君です。」

「よろしくお願いします」

「は、はあ…」

唖然とする桜田をよそに、博士は明らかに自分を変なものでも見ているような目で見ながら、ヒソヒソと話をしている人ばかりを見つめると、再び視線を桜田に移してズイツと詰め寄り、小声で不満を漏らした。

「しかし、桜田さん。事前に伝わったから何とかありましたけれど、保護者にSP同伴だなんて、遠足じゃあ無いんですから…」

「す、すみません。…それでもだいぶ減っているのですよ？ただ、さすがに自分は権限が低くてですね…」

桜田は急に真面目な話…それも自分にとって痛いところを振られて少しうつらえた。

そうでなくても彼と博士の身長差は10cm近くあるため、ズイズイ寄られるのはあまり気持ち良いものではない。

「いえいえ、こちらこそ。…そろそろ移動しましょう、これ以上待たせると皆さん、アレですから」

博士は彼の真意を知ってか知らずか、申し訳なさそうな顔をして深々と頭を下げた。

「そ、そうですね」

桜田は、話を長引かせた元凶は博士であることを指摘したかったが

それこそ面倒なことになると判断し、人だかりに向き直った。

「…では皆さん、こちらです！」

桜田、博士、ロイを先頭に約100人が目的の施設に向かうため、リニアレールに乗る。

レールはドームの内壁に向かって移動を開始し、何かあるたびに桜田が、ドームの多重構造についてのウンチクを語っていた。

振り返ってその様子を見た博士は、

「ツアーガイドじゃあないんだからさ…」

とため息をもらしつつ、今自分がこうやってドームで研究をできるのも、こういう人達だけの力…つまり、この人達のお金のおかげだと考えると、金に限らず自分の力の無さにみじめさを覚えた。

一話(3)

そしてリニアは遮断層を抜けてドームの中に出た。

東京都の市区部ほどの直径のドームの中には建物の集まりが、「野球」(黒い雪とそれ対策のドーム社会によって都市間の長距離移動が困難になったなど、悪条件の重なりで非常に残念ながら廃れてしまった)のドームを二、三個並べたほどの敷地分はあった。

しかし、それ以外には緑地以外は更地や岩山が広がっているだけで、どちらかと言えばそれしかない、といった感じである。

「ああ、説明いたします。このドームは元は皆さんのレジャー施設等の建設を目的としていましたが、浮上都市のライフラインの確保に伴い不要と判断され放棄されていたところを……」

博士は、桜田が目丸くしていた人達に説明しているのをすぐ隣でぼんやりと聞いていると、これまたすぐ隣のロイがやけに神妙な顔をしているのに気づき、軽く声をかけた。

「ロイ、どうした？」

ロイはよほど深く考え込んでいたのか(それとも、さっそく名前を忘れたか)全く反応が無かったが、もう二、三回呼びかけてようやく気づくと、頭をかきながら答えた。

「その、迎えに行く時も思いましたけど、ドームって広いですねえ……」

博士はそういつてため息をついたロイに少し笑いながら

「君、ドームなんかを広いと言ってしまったら地球を見たときひっくり返るぜ？」

と返したものの、ロイを施設の一つのブロックから十年間出していなかったのは他でもない自分だったことを思いだした。

そしてロイの態度に内心で舌を巻きつつ、そんな自分の無頓着さがロイをこんな風にしてしまったと考え、少し嫌な気分になった。

「あのさ、ロイ」

彼はせめて何か言うべきかと思って一声かけるが、

「つきました。保護者の方は会議室で博士と私から今後の説明をいたします。えっと、試験に付き合って貰う生徒だから…コホン、被験生はこのロイ君についていって寮の入口まで向かって下さい」

桜田とリニアに完全にタイミングを持って行かれた。

「さあ博士、行きますよ。…どうしました？」

「…いいえ、何でも」

桜田を尻目に腕時計を見て、相手方のスケジュールもあるかな、と考えた博士はロイのことはひとまず置いて会議室へ向かうことにした。

会議室では博士と桜田が、半ばおさらいに近い形で保護者方に説明をしていた。

「パンフレットを読んでいただいたように、私が研究しているのは、人と機械の一体化です。…といっても詳しい話は直接見てもらってからの方がいいかも知れませんが」

そういつて博士はそばに置いていたヘルメットを被り、すぐ隣の部屋までの敷居を桜田に外してもらい、トラックよりは大きそうな腕を見せると、頭頂部から出ていたコードを何本かをそれに繋いだ。

「では、いきますよ…！」

自身の手を強く開いて、握る動作を繰り返した。

すると、

ギギッ、ギギギギ…

と駆動音を鳴らしながら腕の手もほとんど同じタイミングでそれに続いてみせた。

「まあ、こんなところですね」

と、博士がやや疲れた顔をして振り向いたのと保護者席から、おおっ、と驚きの声が漏れたのも、これまたほぼ同時だった。

一話（4）（前書き）

前回の一話（3）は展開にやや無理があったので投稿直後に今の形に書き直してしまいました、申し訳ありません。

一話（４）

博士が保護者に 腕 の動きを見せていた頃、ロイは地図を片手に被験生の先頭で寮へと歩みを進めていた。

「あつと、ここは曲がるのか。桜田さんてば、人が言う前に博士連れてっちゃうんだからさ…ん、ここは右…で」

「なあ」

「えっ？」

地図と睨み合つてうんうん唸っているロイに一人やや小声で話しかけてきた。

少し赤が混じった黒い髪と白い肌、赤みがかった瞳が特徴のその青年は、ロイと地図を交互に見比べてやや不審そうな顔をしていた。

「お前、さっきのテストパイロットだろ？」

「えっ、ああ、そうだよ」

「もしかして道を忘れたとかか？」

「えっ！ああ、うん。ここは初めて来たからな…」

「初めて、ねえ。テストパイロットなのに？」

ロイの拳動不審な様子に青年は興味を抱いた風で、またそんな青年の興味深そうな態度にロイはさらに戸惑った。

「いや、パイロットだからって行ったことのないのはどうしようもないよ？」

ロイが思い当たる限り至極真つ当な返しをし、とりあえず話題を終わらせようとしたところ青年は

「…ああ、それもそうか」

と、思いの外にあっさり食い下がったので、ロイは安堵するやら気が気でないやらですます緊張した。

「まあ、そんなに入り組んでないから問題は無いと思うよ。…たぶん」

「信用ならないな、どれ見せてくれよ…って地図的には今この辺？」

なら1分もしないで到着するんじゃないか」

「あつ！そうだね…地上と地下で縮尺違うのかなあ」

「地…なんだって？」

「い、いやあ何でも！あ、見えてきた、あれじゃないかな」

「？まあ、いいけど」

寮は、一目見た限りは三階建ての何の変哲もないホテルかアパートといった感じのものだった。しかし、

「誰もいない？」

掃除された痕跡はあるものの、人の気配は感じられなかった。

「みたいだね。おや、何かロビーにあるぞ」

そういった青年が向かったロビーには箱らしきものと、それを矢印で指して『一つ引いて下さい』という文が書かれた建物の見取り図があった。

「…くじ引きか？」

「くじ…ああ、博士から聞いたことがあるぞ。でも、なんで今くじ引き？」

「たぶん部屋でも決めるんじゃないかな…っ」と

そう言った青年は箱の穴の中に手を突っ込み、3aと書かれた小さい玉を一つ取り出した。

「ふむ、3aね…よし、お前も一つ取り出せよ」

「えっ？ああ、わかった」

ロイは青年に続いて箱から玉を取り出した。

「3cって書いてある」

「…ふうん」

「ああ、同じ部屋じゃないか」

「…ホントだ。よろしくな、パイロット君。」

「よろしく、んっ？『くじを引いた人は番号通りの部屋の中でお待ち下さい』、だってさ」

「なるほどね。ちょうど長い道と若干頼りないガイドのせいで疲れていたところさ。どれ、ちょっと部屋を見てみるか」

ロイは青年の皮肉に苦笑しながら後について部屋に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167y/>

天地物語

2011年12月19日19時57分発行